約70年ぶりの新学部 UTokyo College of Designの挑戦

チェンジメーカーを育てる

東京大学は2027年9月、学士・修士一貫5年制の新たな教育課程「UTokyo College of Design（カレッジ・オブ・デザイン）」を開設します。国内外から多様な学生を受け入れるため、9月入学で、授業はすべて英語で実施します。新課程設置のねらいと、東京大学が描くこれからの大学像について、矢口祐人副学長に伺いました。

（聞き手：大学通信 取締役情報調査・編集部長 井沢 秀）

東京大学 矢口 祐人 副学長（UTokyo College of Design 設置準備推進）

——2027年9月、東京大学は約70年ぶりとなる新たな学部を含む学士修士一貫の5年制の新教育課程「カレッジ・オブ・デザイン」を開設します。背景についてお教えください。

藤井輝夫総長のビジョンから生まれたもので、これまでとは異なる東京大学の姿を示し、新しいタイプの学生を育てたいという思いがあります。多様な社会課題を見据え、その解決のために自発的に関わっていくことのできる学生を育てたいという考えから生まれたプログラムです。昨今ではさまざまな社会課題がつながり、より複雑になっています。グローバル化もその一つですけれども、一つの解決策を当てはめるのではなく、多様な対話の中から解決策を模索し、仲間とともに未来を考え、よりよい社会を創造していく。そういう学生を意識的に育てていきたいということです。

——キーワードに「チェンジメーカー」を掲げています。

「チェンジメーカーを育てる」ということは、藤井総長も、学部長予定者のマイルス・ペニントン教授も常に語っています。変化を起こすことは、一人の力ではできないし、一朝一夕にできるものでもありません。カレッジの中で、どういう変化が必要で、それを起こすために学内外のどのような人たちと手を組んで、何をすればいいのか。それを多様な学術知を活用しながら実際に行動できる学生を育てたいということですね。

——「社会課題に取り組み、世界にインパクトを与える人材」が求められています。

難しいことではありますが、カレッジ・オブ・デザインの「デザイン」には多彩な意味が込められています。多様な学術知とデザインの手法を基礎からしっかり学び、高度化していく。その上で、課題や可能性を見出し、課題解決や可能性の実現に向けた方策を生み出し、その意味を社会のさまざまな人に理解してもらえるようにコミュニケーションする力を有する学生を育てたい。専門家としっかり連携しながら多様な専門知をつなげ、そこから生み出される解決策を社会の多くの人々と共有できるような人材ですね。

——学術的な力とコミュニケーション力の両方が必要になります。

東大が長く培ってきた学術分野がありますので、まずその分野をしっかり理解するところから始まります。その中で、それぞれの学生が、広い学術の中から各自の関心・課題意識に基づき自ら専門的な学びを構築し、デザインにつなげるということです。

——カレッジ・オブ・デザインは、いわゆるリベラルアーツカレッジとは違うのでしょうか。

私も英語圏のいろいろなカレッジの教育プログラムを見てきましたが、中核が「デザイン」であることが大きく異なると思います。幅広く学びながら教員と対話し、その成果を積み上げていく。そして4年次以降のキャップストーンプロジェクトにつなげていくということです。

——学部名にある「デザイン」は、私たちが普段イメージするものとは違うようです。

一般の会話で出てくるデザインは、ファッションデザインやグラフィックデザイン、プロダクトデザインなど、手を動かして物をつくるイメージが非常に強いと思います。それを否定するものではありませんが、本学のいうデザインとは、社会の多様な課題を見据え、多様な知を援用しながら解決する力を指します。成果物は具体的な3次元のものになることもあれば、抽象的・理論的なものになることもあります。

——社会の中にどのような課題があるかを見据え、課題解決のためにどうすればよいか。そこをデザインするということですね。

課題は普遍的なものではなく、ある人にとっての問題が、ほかの人々にとっては問題ではないこともあります。その課題の本質は何なのかをしっかり見据えて同定し、学術知と、課題解決に導く実装のプロセスとを組み合わせて考えることが重要なのだと思います。

2つのルートで募集

——入学者は100人。

選抜にあたってはAとBの2つのルートを設けています。大学入学共通テストで受験するのがルートA。国際バカロレアなど、本学が指定する統一試験・資格で受験するのがルートBです。国籍で分けているわけではありませんが、ルートAは日本人が多くなると想定しています。大切なのは、多様な経歴を持つ生徒に来てもらうことです。ルートA、Bの入学者は各50人と半数ずつですので、さまざまなバックグラウンドを持つ学生が一堂に会し、多様な意見を交わしながら学べる環境になると考えています。

——ルートAは、東京大学で実施している学校推薦型選抜と近いのでしょうか。

選抜方法は類似した面もあるように見えるかもしれませんが、一つの高校からの応募者数に制限はありませんし、入学後の学びが全く異な

UTokyo College of Design

Blending design with expansive knowledge

UTokyo College of Designは、デザインの方法論と東京大学の各学部が持つ幅広い専門的な知識を組み合わせ、複雑な課題に取り組む力を育みます。新たなコンセプトを生む力と、それを形にする実現力を備えたリーダーを育成し、社会に革新をもたらすチェンジメーカーとして輩出します。

Year 1	Year 2	Year 3	Year 4	Year 5 Onwards*
Interdisciplinary Foundations (IF) 大学横断で提供される多様な学問領域の基礎	Interdisciplinary Perspectives (IP) 多様な学問領域を横断する選択モジュール		Off-Campus Experience (Internship) Capstone Group Design Project チームワークによるデザインプロジェクト	Capstone Solo Design Project 個人によるデザインプロジェクト（修了展示を含む）
8 Track Design Series デザインの基礎的な手法とスキルを学ぶための8つのワークショップ	Change Maker Design Projects 社会課題や新たな可能性に焦点を当て、高度な手法やスキルの習得を目的にしたデザインプロジェクト			
Viewpoint Series 社会課題やデザインに関連する学内外の第一線の専門家によるセミナー				

Interdisciplinary Foundations（IF）：UTokyo College of Design の1年生が全科目を必修として学ぶ基礎科目群です。IFは、UTokyo College of Designが目指す社会課題の解決に立ち向かうための第一歩として、言わばUTokyo College of Designでの学びの世界に誘う入口であると言えます。IF科目群は東京大学が擁する大きな９つの学問分野（工学、理学、医学、農学生命科学、情報学、法学、経済学、人文学、社会科学）に対応しています。

Interdisciplinary Perspectives（IP）：IFで現代学問分野の全体像を理解した学生たちが、次に具体的かつ多様な学術の視点に触れる場です。5つの領域「Environment & Sustainability」「Technology Frontiers & AI」「Governance & Markets」「Healthcare & Well-being」「Culture & Society」から、合わせて約100の授業科目があり、学生はその中から自分が想い描く社会デザインの基軸となるトピックを選び、試行錯誤しながら自らの学びを深めていきます。

Off-Campus Experience（Internship）：４年生のすべての学生が、国内外の企業や国際機関などで約半年から1年間のインターンシップを行います。学生は大学の外に出て、課題を解決する実践とはどういうことかをその現場での経験を通じて学びます。幅広い学術知やデザインの手法など、これまでの学びをどのように実社会で応用し、建設的な変化を起こすことに貢献できるかを深く考えます。

東京大学『UTokyo College of Design』ホームページより抜粋

ります。推薦入学の学生は入学後、駒場の前期課程（教養学部）で一般選抜の学生と一緒に学びますが、カレッジ・オブ・デザインには前期・後期という概念がなく、5年間を一貫して学びます。入り口は似ているように見えても、その後の教育はかなり違います。

——入試では、大学入学共通テストや英語能力検定試験の成績に加え、高校時代の活動歴も重視されますか。

カレッジ・オブ・デザインの求める人物像はホームページでも公開しており、学習能力やコミュニケーション能力、英語力、論理的・創造的思考力や責任感などを重視しています。

ただ、高校時代の活動について強調しておきたいのは、普通の高校生にはできないような特別な経験を求めているわけではないということです。むしろ、高校生活に一生懸命コツコツと取り組みながら、身の回りにある課題にも目を向け、カレッジ・オブ・デザインで世界中から集まる仲間と一緒にその解決に取り組みたいという思いを持っていることが、とても大切だと考えています。社会課題は、何千キロも離れた国の貧しい地域にだけ存在するものではありません。そうした場所で活動した経験がある人もいれば、そうでない人もいるでしょう。経験する機会がなかったことによって、入試で不利になるわけではありません。

——入学は9月ですが、ルートAの合格発表は2月で、半年ほどのギャップタームがあります。

周囲が4月から大学に通い始める中、この期間をどう過ごすか。旅行に行くのもいいですし、自分なりに何か新しいことに挑戦するのも素晴らしいと思います。ただ、9月から始まる授業はすべて英語で行われます。例えば英検準1級を取得し、英語を得意としてきた生徒でも、英語を母語とする学生と大学で一緒に学び始めれば、最初は苦戦することもあるでしょう。それは当然のことです。

私は教養学部の英語教員として、東大に入ってきた学生の英語力を長年見てきましたが、やはり大切なのは、実際に英語を使う経験を積むことです。読み書きももちろん重要ですが、AIの時代だからこそ、オーラルコミュニケーション、つまり英語で直接対話する力がますます重要になると考えています。総じて日本の学生が苦手としている部分であり、東大の学生でも例外ではありません。

自分の考えていることを筋道立てて話す力、相手の話をしっかりと聴く力、そして相手と対話しながら考えを深めていく（インタラクション）力を身につける必要があります。

そこで4月からオンラインで、教員と英語で会話する機会を用意します。英語で話すことはもちろん、自分の考えを英語で伝えることにも慣れてもらいたい。1対2、場合によっては1対1で、専任教員と1回あたり20〜30分程度オンラインで話すことなどを考えています。また、外部機関と提携したプログラムについても、有料になると思いますが、いくつか提供する予定です。

初年次は全寮制でスタート

——カレッジ・オブ・デザインの学びについて伺います。1年次は学部横断で、多様な学問領域の基礎を学びますね。

本学が擁する9つの大きな学問分野（法学・政治学、経済学・経営学、歴史・哲学、文化・社会、理学、情報学、農学・環境学、医学・薬学、工学）の授業を、100人の1年生全員が一緒に学びます。そこで、「いま、大学ではこういうことが研究されているのか」と、現代の学問の広がりを知ってもらう。それがIF（Interdisciplinary Foundations）の授業です。

その学びをもとに、2年次以降は自分の興味や関心に応じて、IP（Interdisciplinary Perspectives）の5つの領域（「Environment & Sustainability」「Technology Frontiers & AI」「Governance & Markets」「Healthcare & Well-being」「Culture & Society」）に設けられた、約100の授業科目の中から選択します。例えば、医療や社会福祉に興味があり、同時に情報系や文化系にも関心があれば、両方のカテゴリーから授業を選ぶことができます。

一見、関係がないように見えるテーマでも、学生自身が頭の中でつなげていく。授業を担当する教員同士も、互いの研究をよく知らない組み合わせがあるかもしれません。そうした異なる知の出会いから、新しい発想が生まれることを大切にしています。

一方で、デザインの基礎的な手法とスキルについても、1年次に「8 Track Design Series」という授業で、「デザインとは何か」という問いを起点に8つのワークショップを通じて学びます。幅広い学術知とデザインの手法の2つを並行して学ぶことが、カレッジ・オブ・デザインの特徴です。

——授業科目の選択では、学生に助言を行うアカデミック・アドバイザーもいます。

東京大学の教員には世界トップレベルの研究が求められていますが、カレッジ・オブ・デザインでは、教育を大切にしていこうというコンセンサスがあります。もちろん、学生には自主的に考えてもらいたいのですが、その学びを支えるためのアカデミック・アドバイジングも提供し、いつでも先生に相談できる環境をつくります。学生一人ひとりの学びや達成状況を継続的に見ていきます。

——教員と学生の距離も近くなりそうですね。

2年目以降の授業は、多くても20人くらいになると思います。双方向型の授業を重視していますので、教員と学生の距離は近くなるでしょう。そのためのFD（ファカルティ・ディベロップメント、授業内容・方法を改善するための取り組み）も進めています。

——1年次は全寮制で、目白台インターナショナルビレッジに入居します。ねらいを教えてください。

アメリカの名門私立大学などでも、寮生活を必須としている大学があります。カレッジ・オブ・デザインでも多様な学生に来てもらいたいと考えていますので、授業の中だけではなく、授業外の時間もともに過ごしてほしい。一緒に生活することで、食べ物や宗教など、さまざまな違いに気づくでしょう。日々の生活を通じて世界の多様性を認識し、互いの生き方や価値観を尊重する1年間になればいいと思っています。

勉強の面でも、学生同士で助け合ってほしい。それぞれ受けてきた教育が異なりますから、これまで経験したことのない学びに直面することもあるでしょう。教員もサポートしますが、理想的なのは学生同士で支え合うことです。

海外から、日本や東京のことをほとんど知らずに来る学生もいるでしょう。一緒に生活することで、自分にとっては当たり前のことが、ほかの人にはそうでないことにも気づく。そうした発見もまた、「デザイン」につながる大切な気づきだと思います。

社会実装を目指す

——4年次では、全学生が国内外の企業や国際機関などで約半年から1年のインターンシップを行います。学術知やデザインの手法など、これまでの学びの成果を実社会で問うことになります。

インターンシップを必修とするのは東京大学では初めてで、極めて野心的な試みです。学生に「自分で見つけて行ってきて」と任せるのではなく、担当教員を置き、一人ひとりが何をしたいのかを相談しながら、最適な受け入れ先を決めていきます。学生は社会の現場に出て、それまで学び、考えてきたデザインや課題解決の手法が、本当に通用するのかを試すことになります。おそらく、うまくいかないことも多いでしょう。そこで、自分が考えてきたことと現実との距離を肌で感じ、失敗やコミュニケーションの難しさも含めて持ち帰る。そして、どうすれば乗り越えられるのかを修了までに考えてもらいます。キャンパスの中だけで学んでいると、どうしても机上の議論にとどまってしまう可能性があります。現実の社会はもっと複雑で、物事はそれほど簡単に進みません。それを体感する貴重な機会になると思います。

——さらに4年次の後半以降では、学びの成果を形にしていきます。

グループと個人の両方で取り組みます。社会で何かを実現するには、他者と協働する力が欠かせませんから、まずはグループで取り組む。一方で、自分一人で考え、形にする力も必要です。重要なのは、机上の空論で終わらせず、実際に何らかの形になるものを生み出して卒業することです。最終的には発表会として各界からさまざまな方々を招き、社会に対して説得力のあるものを出せるところまで持っていきたいと考えています。

——社会実装ということですね。

そうですね。そして、おそらく教員が想像できる範囲に収まらないことがいいのだと思います。教員が「こんなことを考えたのか」と驚くような成果を、5年間の学びから生み出してほしいですね。

これからの大学を考える

——カレッジ・オブ・デザインは東京大学の11番目の学部になります。

11番目の学部が、既存の10学部とまったく別個の存在になってしまっては意味がありません。カレッジ・オブ・デザインの存在がいい意味でほかの10学部にも刺激を与え、互いに作用し合うような関係をつくっていければと思っています。東京大学には非常に大きな学術的リソースがありますから、他学部の先生にアドバイスを求めたい学生がいれば、自ら訪ねていくこともできるでしょう。他学部の教員がカレッジ・オブ・デザインの授業を担当することもあります。カレッジ・オブ・デザインは、使用言語も入学時期も選抜方法も異なりますから、ほかの学部との違いが非常に目立つ学部になると思います。ただ、ここだけが違っていても、あまり意味はありません。新しい学部をつくることをきっかけに、これからの大学のあり方をほかの10学部とともに考えていく。それが一番重要だと思っています。

——第1期生には先輩がいません。そのメリット、デメリットは。

デメリットは、先輩がいないため、学生の間に蓄積された経験や知識がないことです。大学の教員や職員にとって、試行錯誤する部分があるでしょう。学生の声を聞き、反応を見ながら調整していく部分もあると思います。ただ、それは同時にメリットにもなります。自分でいろいろなことを考えたい、先生と一緒に新しい学びをつくっていきたい、「自分もこのカレッジをつくった一員だ」という思いを持ちたい学生にとってはとても大きなメリットです。決められたレールではなく、レールそのものをつくっていくことに挑戦したい学生にとっては、大きな魅力となるでしょう。

——受験生にメッセージをお願いします。

まったく新しい試みですから、ともに新しい大学、新しい学びをつくっていきたいという思いのある皆さんに、ぜひ受験してもらいたいと思います。高校生のときは、大学の評判や偏差値が気になるでしょう。しかし、本当に重要なことは、自分にフィットした大学を選ぶことです。世界を見渡せば、大都市にある大学も小さな村にある大学も、5万人いる大学も1000人の大学も、それぞれに特徴と魅力があります。だからこそ、自分が「ここで学びたい」と思える大学を選んでほしい。それがカレッジ・オブ・デザインだったらうれしいですね。

UTokyo College of Design1年生全員が入居する目白台インターナショナルビレッジ

構成　玉木栄一、上道敬子／企画　岡本淳司